

最近よく「子ども主体の保育」とか、「子どもの主体性を尊重して・・・」というのを耳にするかと思います。私たちも、それが何を言いたいのか、なんとなくの意味は分かるのですが、そもそも「主体性」とか「主体的」という言葉のとらえ方が使う人によって曖昧なので、保育関係者のなかでも議論がかみ合わないことが多々あります。

北海道大学大学院教育学研究院准教である川田学さんの著書『保育的発達論のはじまり』に書かれている「子どもの『主体性』とはなにか」という部分を読んで、ようやく「主体性」のとらえ方のヒントを得たような気がします。

川田さんは、著書の中で、「一般的に、子どもの主体性を尊重するということ、子どもの自己決定を尊重するというのは、かなり似た意味で使われているように思う。」「では、主体性や自己決定とは何なのか？その考え方には、2つあるように思われる」として、

A 子ども好きなようにさせるのが主体的・自己決定の尊重である。例えば、子どもの意思を尊重して、その子が好きなものだけをお弁当に詰める。(巨峰だけのお弁当など) これを「主体性＝放任」論とします。

B 人に影響されないで決定するのが主体的な自己決定である。例えば、セミバイキングや選択的活動で子どもに「自分で選ばせる」。その代わり、「自分で選んだのだから残さず食べる」「最後までやり遂げる」ことを求めるもの。これを「主体性＝自己」論とします。このBは、一見良さそうに見えますが、突き詰めていくと、「他者を無視してでも、『自分で決めること』が良い」というのが究極の主体性ということになってしまいます。ここで、「食べない」「やらない」という選択が許されないのだとしたら、大人が用意した環境や選択肢、「大人が許す範囲のなかでの選択でしかない」ということにもなります。このAとBは、違っているようで、実は同じ根っこを持っています。「子どもを関係的にみていない」のです。そこで、川田先生は3つ目の考え方、

C 主体性とは『その子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態』・・・「主体性＝関係」論を提案されています。すべてのこどもには、つねに何らかの主体性がある。ただ、子どもと周囲との関係性は、変化する。という考え方です。

ちょっと難しいかもしれませんが、誰にでも、どんなときでも主体性はある(主体的である)。ただし、それはまわりとの関係のなかで、強く表れているときと、弱く見えるときがあるというように、まわりとの関係を含めて捉えるのです。なるほど、と思いました。

(本のなかで紹介されている一例です。)

Aちゃんはその日しょんぼりしています。一方、Bちゃんは無邪気に園庭をかけまわって、来訪者にどんどん声をかけてきます。初めてあった人には、Bちゃんが「主体的」に見えるかもしれません。

でもAちゃんの姿は、最近急速に仲良しになったCちゃんが、風邪で休んでいるために生まれている姿なのです。

保育者はそれを知っています。Aちゃんは、見た目には「いきいき」していませんが、潜在的には「いきいき」しているのです。Cちゃんとの関係が「いきいき」したのだからこそその「しょんぼり」なのです。保育者は、「Cちゃんがお休みでさみしいね」と声をかけることで、Aちゃんの主体性を認めます。

では、Bちゃんはどうでしょうか。一見「いきいき」しているようですが、彼女を知る保育者には、Bちゃんが何かこれといって特別な関係を結んでいる友だちや環境や活動がないことを知っています。

いまは「いきいき」は散発的であり、Bちゃんは何か自分と関係を結んでくれるものをさがしているところでしょう。保育者は、「Bちゃんと響きあうものはないかな、きっかけはないかな」と考えるでしょう。

Aちゃんにせよ、Bちゃんにせよ、保育者は子どもを主体とみなし、子どもと何かとの関係の状態が豊かになることを支援しています。

主体性というのは子どもがどのように周囲の人やモノやできごとと関係を持っているのかを意味する語であり、その子どもが周囲とのあいだに結んでいる関係の状態。つまり、すべての子どもには何らかの主体性があるのです。主体性が弱いように見えるときは、子どもが新しい関係を探しているときであり、あるいは、相手や環境と新しい関係を結び直そうと試行錯誤している過程です。そこに保育的な援助の必要が現れます。保育における援助とは、能力発達をうながすことだけでなく、子どもの主体性の発達を、つまりは子どもが周囲との関係を結んでいく過程を支えるところにポイントがあるのです。

要は、子どもと人やモノ、環境とのつながりや関係性を丁寧に見て、その子だけの成長ではなく、周りとの関係のなかでの成長を考え、より良い関係を結べるよう支援していくことが重要なのだと思います。